

夕。

フハリ

大正二年 二月廿五日翻刻印刷
大正二年 三月十日翻刻發行

尋常小學讀本卷二

定價金七錢

著作權所有

著者兼
發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地

日本書籍株式會社

代表者

大 倉 保 五 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百。八番地

日本書籍株式會社工場

大正二年二月八日

文部省檢査濟

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

株式會社

國定教科書共同販賣所

モクロク

一	ニハトリ	一
二	ヒノテ	二
三	キクノハナ	四
四	オハナトオキク	七
五	ツキ	九
六	カハ	十二
七	イヌノヨクバリ	十四
八	キノハ	十六
九	ナヅ	二十
十	カクレン	二十三
十一	ユフガタ	二十五

十二	シンネン	三十七
十三	タコノウタ	三十
十四	モチノマト	三十三
十五	オカアサン	三十七
十六	ユキダルマ	四十
十七	天ジンサマ	四十四
十八	ワタクシノホシ	四十六
十九	ハナサカヂヂイ (一)	五十
二十	ハナサカヂヂイ (二)	五十四
二十一	ハナサカヂヂイ (三)	五十六

巻二

45

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	エ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	キ	ウ	エ	ヲ
ン				

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ	ピ	プ	ペ	ポ

い ろ は に ほ へ と ち り ぬ
 る を わ か よ た れ そ つ ね
 な ら む う ゐ の お く や ま
 け ふ こ え て あ さ き ゆ め
 み し ゑ ひ も せ す

を は り

三 冊

大正三年九月五日修正印刷
 大正三年九月八日修正發行
 大正三年九月十日翻刻印刷
 大正三年十月十五日翻刻發行

尋常小學讀本卷三

定價金七錢

著作權所有

著作兼
發行

文 部 省

大正三年九月五日
 文部省檢査日

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社工場

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

發 賣 所

株式會社 國定教科書共同販賣所

モクロク

一	サクラ	一	十四	うとからず	四十
二	コレガ スシテカラ	三	十五	ニギトヒタリ	四十二
三	ノアヒ	六	十六	四方	四十四
四	ワタシノウチ	十	十七	ほしどり	四十五
五	ノミノスネ	十三	十八	かへる	四十七
六	ヒバリ	十七	十九	かへるととも	五十
七	なを	二十二	二十	ハイ今スグニ	五十二
八	うしとうま	二十三	二十一	虫ボシ	五十五
九	こりま	二十五	二十二	らみ	五十八
十	タケ	二十七	二十三	かひ	六十一
十一	タウエ	三十一	二十四	ウラシマノハナシ(一)	六十四
十二	ほたる	三十四	二十五	ウラシマノハナシ(二)	六十九
十三	がくかうくもつていも	三十七			

尋三

尋三

一 サクラ

ツツミノ上ニモ、ツツミノ上ニモ、



サクラノハナガ
一メシニサキマシタ。
マコトニウツクシイ
デハアリマセンカ。
ヒラヒラトカゼニ
チルノモマタニ

れいし

ノ ガ タクサン アリマス。竹馬 モ 竹
デ コシラベ タコ ノ ホネ モ 竹 デ
作リマス。

ソノ ホカ 竹 ノ スダレ モ アリ、竹
ノ カキネ モ アリマス。タル ヤ ヲ
ケ ニモ、竹 ノ タガ ガ カケテ アリ
マス。

モノホシザラ ニモ、コクキ ノ サラ ニモ、

舟

センドウ ガ 舟 ヲ ヤル サラ ニモ、竹
ヲ ツカヒマス。竹 ノ ツカヒニチ ハ マ
ダマダ タクサン アリマス。

十一 タウエ

田

アメ ガ フリツヅイテ、田 ノ 水 ガ タ
クサン ニ ナリマシタ。ドコ デモ 田ウエ
ガ ハジマツテ キマス。

馬 ニ アグハ ヲ ヒカセテ、田 ヲ カキ

米ガナル。

ゴラン ナサイ モウ アノ ヒロイ 田ガ
ハツブン バカリ ウウリマシタ。 イマ ニ
アノ ナヘ ガ ノビテ、 アタイ タタミ ラ
ジイタ ヤウ ニ ナリマセウ。

十二 ほたる

ある ばん まえを は はは と じつしよ
に よそ から かへつて きました。

三

三

母

光

みち で ほたる を 一ぴき つかまへて
母 から かみ を もらつて つつみました。
あをい ひかり が かみ の 上 から す
いて みえます。

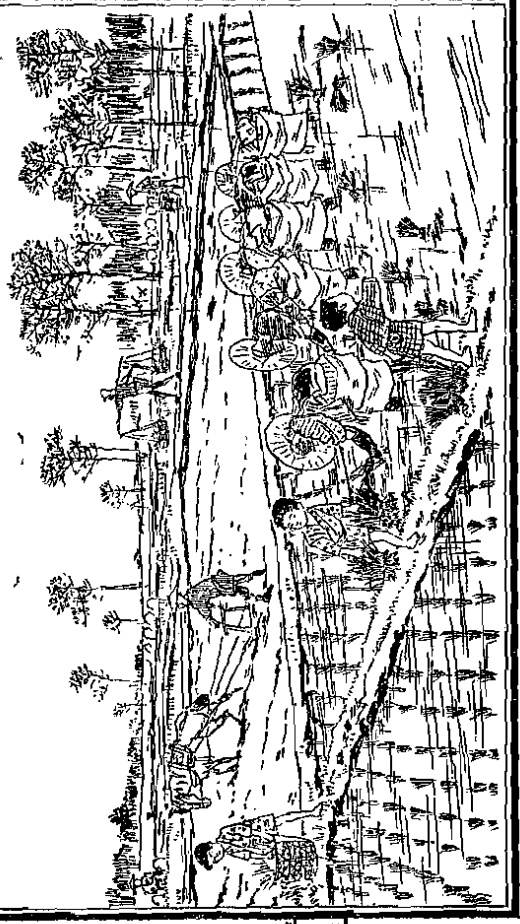
うち へ かへつて、 ちち に みせよう と
したら、 光 が みえません。

「おや、 にげた の か しらん。」

と、 いそいで かみ を あけて みる と、

人

ナラシテ キル 人 モ ア
 リマス。 ナバシロ デ ナ
 ヘ ラ トツテ キル 人
 モ アリマス。 ナヘガゴ ニ
 ナヘ ラ 入レテ、 ハシツ
 テ イク 人 モ アリマ
 ス。 子ドモ ガ ニ三人
 アゼ ニ タツテ、 ナヘ



女

ヲ 田 ノ 中 ヘ ナゲ入レテ キマス。
 ナヘ ラ ウエテ キル 女 ハ、 マルイ カ
 サ、 ヲカブツテ、 アカイ タスキ ヲ カケ
 テ、 コエ ヲ ツロヘテ、 ウタツテ キマス。
 アノ ウタ ヲ オキキ ナサイ。
 「ゴトシ ハ、 ホウネシ、
 ホ ニ ホ ガ サイテ、
 ミチ ノ 小グサ モ

大正四年二月十二日修正印刷
大正四年二月十五日修正發行
大正四年二月十六日翻刻印刷
大正四年二月廿五日翻刻發行

尋常小學讀本卷四

定價金八錢

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

大正四年二月十八日

文部省檢査濟

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社

代表者

大 倉 保 五 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社工場

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

もくろく

一	私どものまち	一	十四	とけら	四十五
二	山の上の星はし	三	十五	とけらのうた	四十六
三	十月三十一日	八	十六	ナジ	五十
四	カキトクリ	十	十七	白ひき (一)	五十二
五	ふじの山	十三	十八	白ひき (二)	五十六
六	ふじのまきり	十五	十九	雪のあと	六十二
七	手ノエ	二十	二十	うぐいす	六十四
八	アキとノアキ	二十三	二十一	みどろノシ	六十六
九	まつねとのき	二十六	二十二	母のシ	六十八
十	こゝろ	二十九	二十三	ヒナツリ	七十二
十一	アラ	三十五	二十四	なすのよ (一)	七十六
十二	さびエノシ	三十七	二十五	なすのよ (二)	八十
十三	のん	四十一			

評 四

評 四

町 31
1
4-4

一 私どものまち

私どものがくかうは町の中ほどに
あります。ふじやかみを賣るみせ
も、本を賣るうちも、みんながくかう
のまじりにあります。

がくかうの西となりはやくば、や
くばのまがひがけらつしよです。
けらつしよのまを北へまがひ

枯

たのおなごは、大に枯れてしまつたやうです。まことにおきのどくなことです。」

とひました。のきくは

「いえ、私たちは枯れたやうに見えても、ねは生きてゐます。土の中で、しづかに、らい年のはるをまつてゐるのです。はるになつて、

生

尋 四

尋 四

今年

だんだんあたたかになると、枯れたあとから、まためをふき出して、そのうちにきれいなはなをさがせて見せます。今年はもうこれですみました。らい年またお目にかかりませう。」とこたへました。

十 ころもつ

タ

三郎のうちでは、タはんが今すん

二六

正

で みんな あつまつて 色々な はなし を
して ゐます。

母 が 父 に

「もう すぐ お正月 ですから、もち米 を
よういしなければ なりません。」

と いひます と、三郎 は それ を きい
て、

「もち に する 米 と いはん の 米 は

尋 四

尋 四

どう ちがひます か。」

母 「おもち に する の は もち米 と
いふ 米 です。いはん の 米 は ねば
りけ が すくなじ から、おもち には
なりません。」

その 時 あね の おはる は、

「三郎 さんは まだ それ を 知らな
つた の ですか。それでは うどん や

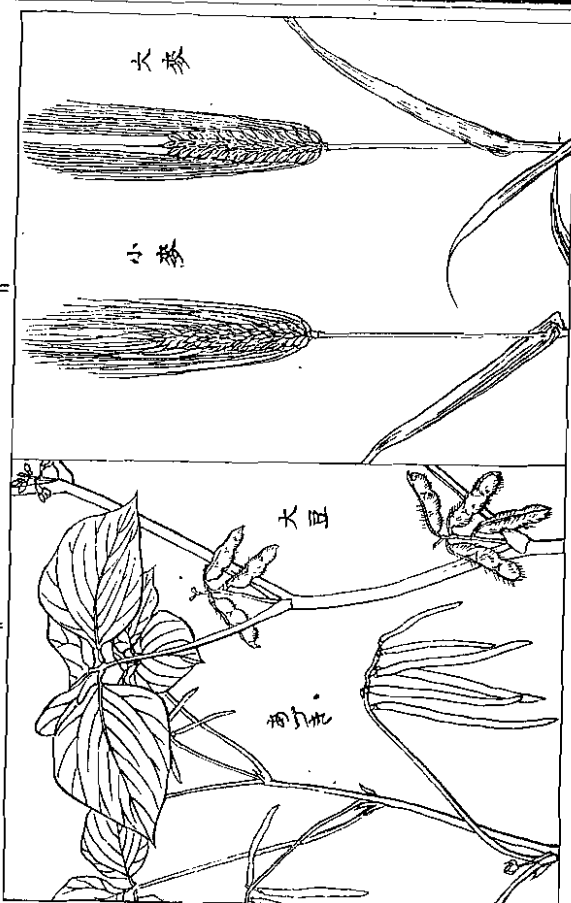
三十一

麥

たうめんは何で
つくりますか。

三郎「知つてゐますと
も。麥です。」

おはる「それではごはん
にたく麥とう
どんやたうめん
にする麥は同



尋 四

尋 四

じですが、ちがひますか。

三郎「同じです。」

おはる「いいえ、うどんやたうめんにする
麥は小麥で、ごはんにたく麥は
大麥です。」

あにの次郎が又よこから、

「こんどはにんさんがきくが、もち
や、だんごのあんは何で作るの

豆

です か。

三郎「豆 です。」

次郎「だんご に つける こな は。」

三郎「あれ も 豆 です。」

次郎「それでは あん の 豆 と、だんご に
つける こな の 豆 と 同じ ですか
ちがひます か。」

三郎「それは 知りません。」

四 十 三

四 十 三

大豆

次郎「あん に する の は あづき と いふ
豆 で、こな に する の は 大豆 と
いふ 豆 です。」

父 は 三郎 の あたま を なで ながら、
「三郎 は こんや は 大そう もの 知りに
なつた ね。」

と いひました。

十一 フラ

皆

イネ ノ ワラ テハ タワラ コモ ムシ
 ロ ナハ ワラテ ミノ ナド ヲ 作リマス。
 又 タタミ ノ トコ ニ シタリ ヤネ ヲ
 フイタリ シマス。ツノ ホカ ツカヒニチ
 ハ マダ イクラ モ アリマス。皆サン ノ
 知ツテ キル ダケ イツテ コラン ナサ
 イ。
 麥ワラ テハ ヤネ ヲ フキマス ガ、又

尋 四

尋 四

物

赤 ヤ 青 ヤ キ色 ニ ツメテ 麥ワラザ
 イク ニモ ツカヒマス。麥ワラザイク ニハ
 カゴ ヤ オモチヤ ヤ 色色ナ 物 ガ ア
 リマス。
 マダ コノ ホカ ニ 麥ワラ テ 作ツタ 物
 テ アツイ ジブン ニ ツカフ 物 ガ ア
 リマス。皆サン 何 テセウ。

十二 ササエ ノ シマン

ちやぶられた。

をはり

尋五

大正三年九月五日修正印刷
 大正三年九月八日修正發行
 大正三年九月十日翻刻印刷
 大正三年十月十五日翻刻發行

尋常小學讀本卷五

定價金八錢

著作権所有

著作兼
發行者

文 部 省

大正三年九月五日
 文部省檢査済

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社

代表者

大 倉 保 五 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社工場

三才堂印刷所

ちくろく

第一	あまのいはと	一	第十四	ていしやほ	三十八
第二	春が来た	四	第十五	汽車ノタビ	四十一
第三	神武天皇	五	第十六	かみなり	四十五
第四	水のなび (一)	八	第十七	瓜	四十九
第五	水のなび (二)	十一	第十八	カウモリ	五十二
第六	ナラノ大アツ	十三	第十九	炭ト油	五十六
第七	コヒ	十五	第二十	森のこゑ	六十
第八	母の手つだい	十八	第二十一	はがき	六十三
第九	かまぬすびと	二十二	第二十二	マツリ	六十七
第十	うめぼし	二十七	第二十三	鹿ノ水ガレ	七十
第十一	本	三十	第二十四	ひまどろいふのちかおとし (一)	七十四
第十二	蝶	三十三	第二十五	ひまどろいふのちかおとし (二)	七十七
第十三	小千部 ちぢうべ のすがる	三十六			

号五
号五

戸
御
第

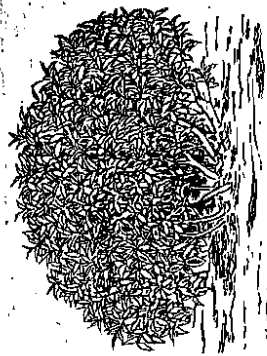
第一 あまのいはと

あまのいはと
天照大神の御第にすさのをのみことといふきのあらひ神さまがあらひました。ある時生馬のかはをはいで大神がはたをおらせていらつしやる所へおなげ入れになりました。大神はおどろいてあまの岩戸の戸をたててその中へおかくれになりました。さあ太へん、今まであかるかつたせかいが

第十一 茶

茶

コノニ茶ノ木ガアリマス。ハガヨクシゲツ
テ下ノ方ハ枝モ見エマセシマルクカリコ



シダニハ木ノヤウニ見エマ
ス。茶ノ木ノ高サハ大テイ三
四尺グラサデアタ、カイト

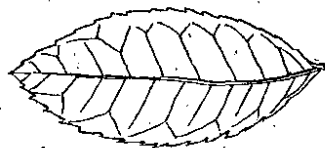
コロニヨクソダツ木デス。

葉

コレハ茶ノ葉デス。ヨクソダツタ茶ノ葉ハ

号五

号五

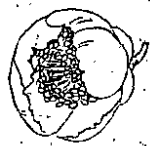


長サガ二寸バカリモアリマス。

ツヤガアツテ、色ハコイミドリ

色デス。

十一月コロ白イ色ノ花ガサキマス。花ニハ



ベシガ五ツアツテ、ヨイニホヒガ
シマス。ソノ實ハツバキノ實ノヤ



ウニカタクテ、ソノ中ニマルイ種
ガニツニツツツアリマス。

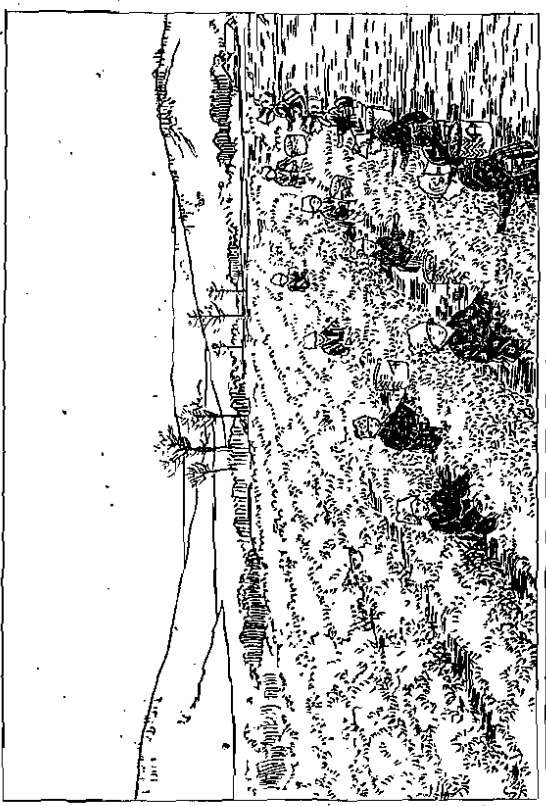
種

三十一

番

ユノハ茶畠デス。大ゼイノ女ガ茶ヲシンデ
申マス。

茶ハシンメノ出ルジブ
ンニソノデタテノ葉ヲ
ツムノデス。五月ゴロカ
ラツミハジメマスガ、一
バンハジメニツムノヲ
一番茶トイヒマス。ソノ



尋五

尋五

蝶

葉デコシラヘル茶ガ一番ヨイ茶ニナリマ
ス。ソレカラ一月ホドタツテツムノヲ二番
茶トイヒマス。マタ三番茶、四番茶アデモツ
ムコトガアリマスガ、ツンナニツムト茶ノ
本ノタメニハヨクナイサウデス。

第十二 蝶

サクラノ花ノ下ニトシテキル白イ蝶ヲ見
ルト、花ガデツタノカト思ヒ、サノ畠ニアソ

顔

らむやうないなびかりがして耳がさける
 やうなおそろしいかみなりが鳴りました。
 二人は思はず耳に手をあててそこにたふ
 れました。しばらくたつて顔を上げてその
 あたりを見まはすとかみなりがおちてそ
 の高い木がまつ二つにさけてゐました。
 音次郎は友吉のかたに手をかけて

「あゝあぶなかつた。もし君が居なかつた

尋五

尋五

僕

瓜

西瓜

平

ら僕は死んでしまつたのだらう。
 といひました。

第十七 瓜

キ瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔・西瓜・トウ瓜・カボチ
 ヤ・ヘチマナドラ瓜・トイフ・マツ形・カライヘ
 バ・キ瓜・白瓜・ヘチマハ・細長ク・トウ瓜ハ・太ク
 カボチヤハ・平タイ・マクハ瓜ヤ・夕顔ヤ・西瓜
 ニハ・マルイ形ノモ・長イ形ノモアル。キ瓜ニ



ハカハニ小サイトデガアリ、カ
ボチヤニハデコボコガアル。
ノ他ノ瓜ハ大テイナメラカデ
アル。

カボチヤハ中ガ黄色デ、西瓜ハ
中ガ赤イ。西瓜ノ種ハ大テイ黒
イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ
多イ。

西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、
ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲ
ノコス。ナマデソノマハタベル
ノハ、マクハ瓜ト西瓜デ、ニナケ
レバタベラレナイノハ、カボチ
ヤトトウ瓜トタ類デアル。キ瓜
ヤ白瓜ハ生デ瓜モニニシテモ、
ツケ物ニシテモタベ、又ニテモ



廣

タベル。ヘチマハワカイウチハタベラレル
ガ、實ガイルトタベラレナイ。

瓜ノ葉ハ廣クテドゲノハエテキルノガア
ル。花ハタ顔ダケガ白クテソノ他ハ皆黄色
デアル。

瓜ノツルニハナスビハナラヌ。

第十八 カウモリ

仲

昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワヲ

尋五

尋五

勝中

シタ時、カウモリハ

「私ハ鳥デモケモノデモナイカラ。」

トイツテドチラヘモツキマセシタ。ソ
ノ中ニケモノガ勝チサウニナシタノヲ見
テ、ニハカニ

「私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケ
モノノ仲間ダ。」

トイツテ、ケモノノミカタニナリマシタ。

五十三

守りてつくせ家のため國のため。

終

大正四年二月廿五日修正印刷
大正四年二月廿七日修正發行
大正四年三月一日翻刻印刷
大正四年三月十日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

大正四年三月三日
文部省檢査濟

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地。

日本書籍株式會社

代表者 大 倉 保 五 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

日本書籍株式會社工場

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

尋常小學讀本卷六

定價金 八 錢

翻刻定價金 拾 錢

第一	日本	一	第十四	豊臣秀吉 (一)	四十三
第二	四季	六	第十五	豊臣秀吉 (二)	四十八
第三	遠足	七	第十六	塩ト砂糖	五十三
第四	ガン	十二	第十七	上杉謙信	五十五
第五	取入れ	十四	第十八	人のなきけ	五十九
第六	物サシトマスバカリ	十七	第十九	熊	六十四
第七	かしこい子ども	二十	第二十	材木	六十七
第八	ヤクワントテジヒ	二十四	第二十一	古机	六十九
第九	よいでつち	二十九	第二十二	むね上げ	七十四
第十	織物	三十三	第二十三	港	七十七
第十一	太郎の日記	三十五	第二十四	大阪	八十
第十二	京都からの手紙	三十九	第二十五	かぞへ歌	八十二
第十三	コトワザ	四十一			

第一 日本

海岸
砂

わが日本は島國である。四方は海にとりま
かれてゐる。海岸には切立てたやうな岩山
もあるが、平たい砂原になつてゐる所が多
い。一面に小松のはえた小松原もあり、又大
きな松がならんだ長い松原もある。海べは
ふだん強い風がふくから、高い松はしぜん
におもしろい枝ぶりになつてゐる。白い砂

誰

けてない金は一厘でも取つてはならな
い。」

「それでもだんなが居ないから、だまつて
ゐれば、誰にも知れはしない。」

「だんながおるすだから、なほさらまちが
ひがあつてはならない。」

といつても、長松はまだ笑つてゐた。

あとになつて、主人はこの事を聞いて、直吉

第六
章

直

織

絹

は正直ものだとほめて、長松にはひまをや
つた。

第十 織物

織物ニハキヌ織物・モメン織物・アサ織物・毛
織物・ナドイロくアリ。絹糸ニテ織リタル
モノヲ絹織物トイフ。着物・羽織・ハカマ・オビ
・ナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ絹織
物ニテツクル。

木綿

木綿糸ニテ織リタルモノヲ木綿織物トイフ。ワレヲ着物ハ多クコノ木綿織物ニテツクル。



ワタ

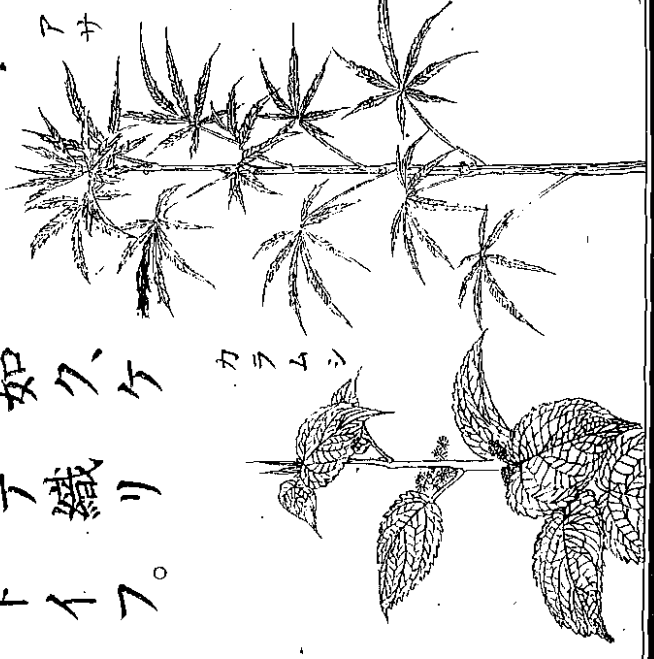
麻

麻又ハカラムシノ糸ニテ織リタルモノヲ麻織物トイフ。麻糸ニテ織リタルモノハカヤナドニツクリ、カラムシノ糸ニテ織リタルモノハカタビラナドニツクル。

尋六
尋六

如

フアンネル・ラシヤ・メリンスナドノ如クケモノノ毛ヲツムギテ織リタルモノヲ毛織物トイフ。



アサ

カラムシ

記

曜

第十一 太郎の日記

十二月十日 日曜 晴 今日天気はよ

もくろく

第一	楠木正行	(一)	一	第十四	西洋紙と日本紙	四十六
第二	楠木正行	(二)	五	第十五	郵便の話	五十
第三	ゐなかの四季		九	第十六	東京見物 (一)	五十四
第四	商業問答		十二	第十七	東京見物 (二)	五十七
第五	問合の手紙		十五	第十八	犬	五十九
第六	豆の一族		十九	第十九	水とからだ	六十三
第七	塙保己一		二十二	第二十	桃をおくる手紙	六十六
第八	手ノハタラキ		二十五	第二十一	海ノ生物 (一)	六十九
第九	鷺		二十八	第二十二	海ノ生物 (二)	七十四
第十	やき物とぬり物		三十四	第二十三	何事も精神	七十八
第十一	勸工場		三十六	第二十四	航海の話 (一)	八十
第十二	山内一豊の妻		三十九	第二十五	航海の話 (二)	八十四
第十三	家の紋		四十四	第二十六	廣瀬中佐	八十九

尋七
尋七

我 生 場 歳 戦

第一 楠木正行 (一)

楠木正行ハ正成ノ子ニシテ父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテソノ折父トトモニ戦場ニ出デントセシガ正成ハ道ニテサトスヤウ、

我聞クシハ子ヲ生メバ三日ニシテコレヲ谷ソコヘオトシテソノカラタメストイフ。ナンデハ年ステ二十歳ヲコエタリ。ヨク父ノ言フコトラ聞分ケヨコノ度ノ戦敵ハ

願

類

い實のなるやうなのをお願い
 申します。又母がかねぐめづ
 らしい草花をほしいくと申
 して居りますからおてがずで
 も、これも二三種買つて来てい
 たらきたうございます。花の種
 類は何でもよろしうございま
 す。

五月四日

鈴木愛吉

七
七
七

高橋忠一様

第六 豆の一族

藤

にはの藤の花が咲いて、風が吹く度にむらさ
 きのふさが動いてゐる。畠のゑんどうががき
 の外からこゑをかけて、

「とくに申し上げようと思つてゐました。あ
 なたと私は親類ださうでございますから、
 どうかこれからお心安く願ひます。」

といふ。藤は

親

安

似

「私はちつとも存じ
ませんでした。どう
いふわけでおたが
ひに親類の間がら
でございますか。」



と問へば、ゑんどうのいふに

「あなたと私は大そう似てゐ

るではありませんか。第一あなたにも私に
も豆になります。葉は羽形で、二枚づつ向ひ

尋七

小豆

承

合つてゐますし、花は同じく蝶の形をして
ゐます。大豆・小豆・さくげ・そら豆・なた豆など
はすべて私どもの親類です。豆類にはつる
になるのとならぬのがあります。」

藤「さうでございますか、はじめて承りました。
私はこんな大きななりをしてゐますが、畠
の藤豆さんとはちがつて、私の豆はたぐら
れません。まことにおはづかしい次第です。」

ゑんどう「あなたはそのお美しい花だけでたくさ

草

者

書

んでございます。あなたほどの大きな花
さは見たことがございません。私どもの親
類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の
野に咲くれんげ草でございませう。

第七 塙保己一

目ハ見ユレドモ、字ノ讀メザル人ヲアキメク
ヲトイフ。シカルニ目ハ見エズシテ、大學者ト
ナリシ人アリ、塙保己一コレナリ。

保己一ハ五歳ノ時メクラトナリシガ、人ニ書

辭セ

勉心
強

江



物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカ
バ、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲア

ラハセリ。保己一ノ家ハ今
ノ東京、ソノコロノ江戸ノ
番町ニアリ、多クノデシ保
己一ニツキテ學ビシカバ、
時ノ人

番町テ目アキ目クラニ
物ヲキハ。

サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセシコレハチエガ少イカラデス。手バカリ動カシテモ、チエガナケレバ何ノ役ニモ立チマセシ。

第九 蠶

一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。この長い絲を出す蟲が百匹もなければ、本綿は、一尺の

絹織物を織る絹絲は出来ない。蠶をかつて絹絲を取り、絹絲を織つて絹織物にするまでには、大そうな手間がかかる。それを考えると、絹織物のあたひの高いのも、けつしてむりではない。

卵からかへつたばかりの蠶は、あり程の大きさで、長さは一分ばかりしかない。けれども一月ばかりの内に、皆さんの小指程の大きさになり、色もはじめは黒いが、だん／かはつ

食

頭



て青白くなる。

かへりたてからしきりに食物をさがしてゐて、桑の葉をやるゝすぐ食ひはじめる。小さい時分はやはらかな葉をこまかく切つてやるが、大きくなると、枝のまゝやる。食つてしまふと、頭をうごかして、しきりに桑

七

の葉をたづねる。大きな蠶がたくさんで桑の葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるやうな音がする。そのころになると、二万匹の蠶をかふのに、人一人付きゝりて、眠るひまもない程いそがしい。

蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠ることが四度ある。眠る度に皮をぬぎかへて、しまひにはからだがすきとほつて見える。

包

この時木の枝やわらなどで作つたまふしくうつしてやると口から美しい絲を出してからだを包む。それが二三日の内に出来上つて繭になる。蠶の口の中には小さいくだが一つある。そのくだから出すねばつたしるが外へ出るとすぐにかわいて絲になるのである。

破

繭の中の蠶はさなぎとなる。蠶が繭を作つてから二十日あまりたつとさなぎが蝶のやうな形になつて繭を破つて出て来る。これを蠶

三十四

産

蠶卵紙

の蛾といふ。
蛾が出ると絲が取れないからまだ出ない内にむしてさなぎをころしておいてそれから繭をにて絲を取るのである。蛾は繭から出るとやがて卵を産んで間もなく死んでしまふから出て来るとすぐに紙の上において卵を産みつけさせる。その卵を産みつけさせた紙を蠶卵紙といふ。一匹でおよそ四五百程の卵を産む。

蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春こ・夏こ・秋こといふ名がある。わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

第十 やき物とぬり物

茶わん・土びん・皿はちなどはやき物にして、ぜん・わん・ぼん・重箱などはぬり物なり。

やき物をつくるには、土又は石のこをねりかためてかわかし、かまどに入れて焼く。かくし

て出来たるものをすやきといふ。我らのつねに用ふる茶わん・皿はちの類はこのすやきにうはぐすりをかけてふたゝび焼きたるものなり。花鳥・山水・人物などのものやうはうはぐすりをかくる前にゑがく。

塗物はくりたる木又は組合せたる木竹又紙などにうるしを塗りてつくる。塗物に黄・赤・黒・青などさまざまの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。うるしの上に金又は銀にてゑ

片 坐

カクルコトイヨ／＼盛ナリ。中ニモ福井丸ノ
ボートニハ敵ノ砲丸雨ノ如クニ降リソ、デ
リ。ボートハ水ニオツル砲丸ノシブキニ包マ
レタリ。中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲ
ウシナヒタルヲナゲキキタリ。一發ノ砲丸ハ
タチマチ中佐ノ身ヲ拂ヘリ。中佐ハ一片ノ肉
ヲボートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。

終

尋七

大正三年九月五日 修正印刷
大正三年九月八日 修正發行
大正三年九月十日 翻刻印刷
大正三年十月十五日 翻刻發行

尋常小學讀本卷七

定價金八錢

著作權所有

發行者兼

文 部 省

發行者刻

東京市日本橋區新石衛門町十七番地。

日本書籍株式會社

代表者 大 倉 保 五 郎

印刷者

東京市小石川區芝罘町百。八番地

愛 敬 利 世

印刷所

東京市小石川區芝罘町百。八番地

博文館印刷所

日五十月九年三正大
濟查檢省部文

發賣所

東京市日本橋區新石衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

重刊台紙三校資料

重刊	元	八	寄贈
先	松	本	市橋
天	桐	原	義司

終

尋人

大正四年三月十一日修正印刷
 大正四年三月十三日修正發行
 大正四年三月十四日翻刻印刷
 大正四年三月廿五日翻刻發行

著作權所有

發行者兼

尋常小學讀本卷八

定價金八錢

文部省

東京市小石川區久堅町百〇番地。

日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

東京市小石川區久堅町百〇番地

日本書籍株式會社工場

印刷所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

日五十月三年四正大
 濟查檢省部文

發賣所

もくろく

第一	皇大神宮	一	第十四	電報	四十五
第二	家宮日記の一節	三	第十五	藤原鎌足	四十九
第三	たけがり	八	第十六	鳥	五十四
第四	寫眞をおくる手紙	九	第十七	近江八景	五十九
第五	働クコトハ人ノ本分	十三	第十八	木綿着物ノ由來	六十二
第六	松下禪尼	十六	第十九	手紙	六十六
第七	白雀 (一)	十八	第二十	胃と身體	六十九
第八	白雀 (二)	二十二	第二十一	虎ト猫	七十二
第九	ワザクラム	二十七	第二十二	世界の話 (一)	七十五
第十	かぢ屋	三十一	第二十三	世界の話 (二)	八十
第十一	花ごよみ	三十四	第二十四	橘中佐 (一)	八十三
第十二	マツチ	三十八	第二十五	橘中佐 (二)	八十六
第十三	火事	四十一	第二十六	名古屋	九十三

諸 生 代 宮



第一 皇大神宮

代々の天皇は皇大神宮
 をたふとびたまふこと
 きはめてあつく國民も
 また深くうやまひ奉り
 て一生に一度はかなら
 ず伊勢に参拜せんと心
 がけざるものなし。諸子
 は皇大神宮のかくばか

路

第三 たけがり

秋の日の空すみわたり、
 風暖にさてもよき日や。
 山遊びするによき日や。

友よ、來よ。手がこを持ちて、
 いざ、裏山にきのこたづねん。
 山深く行きてたづねん。

たどり行く細路づたひ、
 はや、かうばしくきのこにほへり。

尋へ
 尋へ

呼

山風にきのこかをれり。

うれし、この松の根もとに、
 まづ見つけつと高く呼ぶ聲。
 やまびこにひびく呼聲。

いでや、あの岩の小かげに、
 皆うちよりてえもの數へん。
 たけがりのいさをくらべん。

第四 寫眞をおくる手紙

この間にいさんがかへつて來まし

紅葉 遊 併 壯 直

賜へり。此の湖の落口は華嚴瀧けいごんのたきとなる。直下四十丈、
 壯觀名狀すべからず。此の水即ち大谷川の上流を
 成せり。

我が國到るところ名勝の地にとほしからざれど
 もよく人工の美と天然の美とを併せたるは日光
 に如くはなし。されば一年中遊覽者跡を絶たず夏
 の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶもの最も
 多し。外國人の我が國に來る者亦必ずこゝに遊び
 て日光の結構を賞せざるものなし。

尋常小學讀本卷九終

重訂

第九

大正二年七月十五日 翻刻印刷
 大正二年七月三十一日 翻刻發行

尋常小學讀本卷九

定價金九錢

昭和四年三月
 松本市城西
 百瀬元海
 重訂

著作權所有

發行者兼

文部省

省

發行

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

日本書籍株式會社

代表者大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區堅町百八番地

愛敬利世

印刷所

東京市小石川區堅町百八番地

博文館印刷所

大正二年七月十八日
 文部省檢査
 濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

目 録

第一課	草薙劔 くさなぎのつるぎ (一)	一	第十五課	かぶりもの	四九
第二課	草薙劔 くさなぎのつるぎ (二)	四	第十六課	動物ノ體色	五三
第三課	花ノサマ はなノサマ	六	第十七課	養生	五七
第四課	舞へや歌へや	十	第十八課	坂上田村麻呂 さかうえのむらまろ	六二
第五課	注文状	十二	第十九課	空氣	六四
第六課	利根川	十四	第二十課	雨と風	六六
第七課	水兵の母	十八	第二十一課	水害見舞の文	七〇
第八課	我が陸軍	二十四	第二十二課	貯金	七五
第九課	靖國神社	二七	第二十三課	菅原道真 すがはらのみちまこと	七八
第十課	汽船汽車の發明	三十	第二十四課	競馬	八二
第十一課	昔の旅	三十五	第二十五課	貨幣	八七
第十二課	箱根山	三八	第二十六課	三才女	九一
第十三課	旅行先の父に送る手紙	四二	第二十七課	日光山	九三
第十四課	駱駝 らくだ 乘	四四			

尋九

尋九

尋常小學讀本卷九

第一課 草薙劔くさなぎのつるぎ (一)

代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。草薙劔は即ち其の一なり。此の劔初は天叢雲劔あまのむらぐもりのつるぎと申し、後に改めて草薙劔と申すこととなれり。いでや此の劔の由來をかたらん。

神代の昔、天照大神あまてらすおほみかみの御弟素戔嗚尊すさのものをみこと出雲の國にいたり給ひしに、簸川ひのかはのほとりにて、夫婦の老人一人

即 器 改 劔

婦

大正四年三月廿一日 修正印刷
 大正四年三月廿四日 修正發行
 大正四年三月廿七日 翻刻印刷
 大正四年四月十日 翻刻發行

尋常小學讀本卷十

定價金九錢

著作權所有

大正四年三月二十九日
 文部省檢査濟

發行作家

文部省

發行翻

東京市日本橋區新右衛門町十七番地

日本書籍株式會社

代表者

大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區金町五丁目八番地

愛敬利世

印刷所

東京市小石川區金町五丁目八番地

博文館印刷所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社

國定教科書共同販賣所

除本城西一
所百瀬元海

發賣所

重三 三三 三三

目 録

第一課	日本一の物	一	第十五課	齋藤實盛 あふもさきり	五十
第二課	葉	四	第十六課	兵衛内の生活	五十五
第三課	保安林	八	第十七課	足尾銅山	六十
第四課	家	十一	第十八課	捕鯨船	六十三
第五課	紫式部と清少納言	十五	第十九課	勇ましき少女	六十六
第六課	本	十七	第二十課	温泉	七十一
第七課	張良と韓信	二十二	第二十一課	人ノ身體	七十五
第八課	入營する友におくる	二十六	第二十二課	あいの風俗	七十九
第九課	冬景色	二十七	第二十三課	家畜	八十三
第十課	甘藷 カンショ	三十	第二十四課	松の下露	八十六
第十一課	たしかな保證	三十四	第二十五課	講話會の案内文	九十
第十二課	水師營の會見	三八	第二十六課	大和巡り (一)	九十三
第十三課	花筵 ハナデン	四十一	第二十七課	大和巡り (二)	九十六
第十四課	模様と色	四十四			

第十

尋常小學讀本卷十

第一課 日本一の物

日本一の高山は臺灣たいわんの新高山なり。其の高さは一萬三千七十餘尺にして、富士山より高きこと凡そ一千尺なり。昔より富士は日本一の高山と稱せられしが、明治二十七八年戰役の後臺灣の我が領土となりしより、富士は第二位に落ちたり。然れども四時雪をいたゞきて潔く、其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふ

ずどんと一發。何を撃つたのだらう。銀杏の木の鳥は急いで山の方へ逃げて行く。榛の木の子は一度にぱつと飛立つた。

第十課 甘藷

甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。名稱ノカク異ナルヲ以テモ、此ノ芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。原產地ハアメリカニシテ、アメリカヨリルソンニ傳ハリ、ルソンヨリ支那ニ入リシガ、支那ヨリ琉球琉球ヨリ

第十

第十

薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ、今ヨリ三百年以前ニシテ、内地ヘノ渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナリ。然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、主トシテ井戸平左衛門ト青木昆陽トノ盡力ニヨル。二人ガ之ヲヒロメントセシハ、不作ノ年餓死スル人ノ多キヲアハレミ之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

井戸平左衛門ハ石見ノ國ノ役人ニテ、百七十餘年程前ノ人ナリ。日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノ

三十一

ヲト心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キ
テ、大イニ喜ビ、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之
ヲ試植セシニ、其ノ出来非常ニ良カリシヲ以テ、數
年ナラズシテ石見一國ニヒロガリ、是ヨリ後ハ五
穀不作ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノナキニ
至レリ。隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、遂ニハ中國
地方全體ニ及ブニ至レリトイフ。サレバ平左衛門
ノ死セシ時ハ、中國ノ人々、知ルモ知ラヌモ父母ニ
別ル、如ク悲シミタリトナリ。

昆陽ハ有名ナル學者ニテ、平左衛門ヨリハ少シ後

尋十

尋十

ノ人ナリ。當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流
スコトアリシガ、是等ノ島ニハ作物ノ出来ザル荒
地多ケレバ、罪人ドモハ魚類果實等ニテ命ヲツナ
グノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。昆陽
ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト
思ヒ、或年試ミニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚タ良カ
リキ。ヨリテクハシク其ノ作方貯藏ノ方法等ヲ記
シテ幕府ニ奉レリ。幕府ハ此ノ書物ニ種芋ヲ添へ
テ、島々ヲ始メ、内地ノ所々へ配布セシカバ、間モナ
ク全國ニ作ラル、ニ至レリ。

三十三

昆陽ハ七十二歳ニテ死セリ。東京ノ西南、目黒ナル墓石ノ面ニ「甘藷先生墓」トアリ。

第十一課 たしかな保證

外國の或商會で新聞紙に店買入用の廣告を出した。志望者は五十人ばかりも來たが、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。

或人が主人に向つて、知名の人の手紙を持つて來た者も大勢あつたのに、どういふ御見込であの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

主人は答へて、

第十

第十

「あれが此の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいつてからは靜かに後の戸をしめた。きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、すぐに立つて椅子をゆづりました。人に親切なことは是でも知れると思ひました。あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風がなく、何を聞いても一々明白に答へて、しかもよけいなことはいひません。はきくしてゐて、禮儀作法をわきまへてゐることも、それですつか

東方文明先進の
上下心残一にして
(七)

任務は重き日本國。
同胞すべて六千萬。

修身の徳是なりと、
戦後經營かくこそと、
大みことのりたふとびて

教育勅語のり給ひ、
戊申ぼしんの詔書かしこしや。

同胞すべて六千萬。

尋常小學讀本卷十一 終

尋常小學讀本卷十一

十一

大正三年九月五日修正印刷
大正三年九月八日修正發行
大正三年九月十日翻刻印刷
大正三年十月十五日翻刻發行

尋常小學讀本卷十一

定價金九錢

昭和六年定價金拾參錢

著作權所有

著者兼
發行者

文 部 省

大正三年九月十五日
文部省檢査
済

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地。

日本書籍株式會社

代表者

大 倉 保 五 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

日本書籍株式會社工場

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

發 賣 所

目 録

第一課	吉野山	一	第十五課	招待状	六十一
第二課	蜜蜂	五	第十六課	料理	六十四
第三課	分業	九	第十七課	時間	六十七
第四課	兒島高徳	十三	第十八課	畫工の苦心	七十一
第五課	瀬戸内海	十七	第十九課	瀑布	七十五
第六課	我は海の子	二十	第二十課	鰯飼	七十八
第七課	車と船	二十四	第二十一課	紡績	八十三
第八課	我が海軍	二十九	第二十二課	蠶の農工業	八十七
第九課	臺灣より樺太へ	三十五	第二十三課	物の價	九十
第十課	熊王丸	四十一	第二十四課	樺太より臺灣へ	九十五
第十一課	アラビヤ馬	四十六	第二十五課	諸葛孔明	百二
第十二課	笑	五十一	第二十六課	朝鮮の風俗	百六
第十三課	少年鼓手	五十四	第二十七課	平和なる村	百十一
第十四課	出征兵士	五十九	第二十八課	同胞すべて六千萬	百十五

第十一

第十一

尋常小學讀本卷十一

第一課 吉野山

吉野山霞の奥は知らねども、
見ゆる限りは櫻なりけり。

全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。

六田の渡を渡りて上り行く坂路の左右すでに櫻多し。
行くく吉野宮に參拜し、村上義光よしみつの墓をとぶらふ。眺望いよく開けて、満目總べて花なり。

奥
ろ

満

底

物なり。鰻うなぎをくはへてくちばしに巻附かれ、持て餘して見ゆるものをかし、かゞり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をはげます一法たり。魚は火の光を追ひて集り來り、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふることを得るなり。

彼方
彼處

鵜はくゞり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、漁夫は一時間餘にして、數千百尾の鰯を得るを常とす。數隻の漁舟相並び、波にくだくるかゞり火の下に、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、

此處

此處にあらはれ、之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯びさくの光を水にうつせる奇觀は、筆も言葉も盡し難し。鵜をはを引上げて、鵜のふなばたに立並べる時、半月金華山きんがわの上に出でて、川風たもとを拂ふも快し。

紡績

第二十一課 紡績

我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。年々一億圓ノ綿花ヲ輸入シテ、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所用ヲミタシテ、尚海外ニ輸出スルモノ五千萬圓以上ニ及ブ。

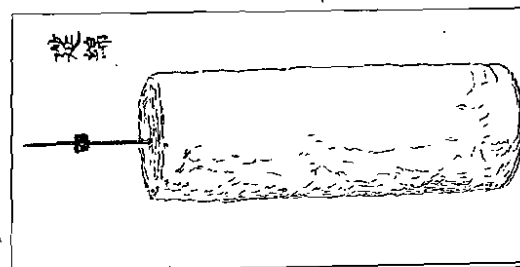
紡績工場ニ入リテ見ヨ。蒸氣機關ノ力ニヨリテ自動ス。

廻

ル機械ハ幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ何人モ驚クナルベシ。

先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ土砂其ノ他ノ雜物ヲ去リ鐵棒ニアキテ長サ四尺ばかり直徑尺餘ノ筵綿トス。之ヲ紡績作業ノ第一段トス。皆機械ニヨリテナサル。其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ吹雪ノ風ニクルフガ如ク機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

既ニ筵綿トナレバ梳綿機ニカクコレニハ細小ノ針金ニテ作リタルブラッシノ仕掛ア



第十一

第十一

延

巧
管

リテ筵綿ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。アタカモ人ノ頭髮ヲクシケヅルニ似タリ。

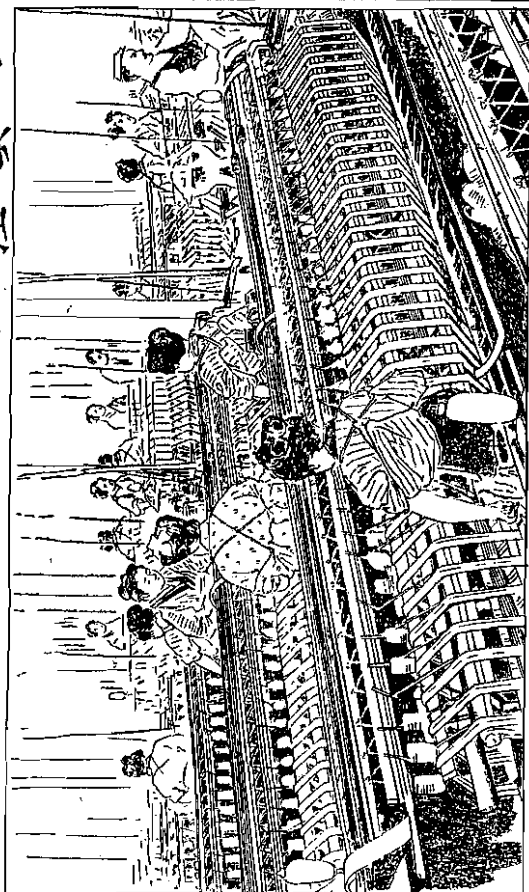
梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ眞白雪ノ如ク四尺程ノ幅トナリテ進ム様精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。此ノ流ハ自ラ集メラレテ親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中ニ入ル。

既ニ鐵管ニ滿ツレバコレヲ練篠機ト稱スル機械ニカケテ或ハ合シ或ハ延シ又更ニ他ノ機械ニ移シイヨイヨ延シテイヨ／＼細クシ次第ニヨリヲカケテ絲ノ形ニ近ヅカシム。サテ最後ニ精紡機ニ移シテ適當ノ太サ

八十五

紡

トナシテ更ニヨリヲカゲツム
ニアキトラシム。工女ハ常ニ其
ノ前ニ立テ、絶エズ絲ニ目ヲ注
ギテ切ルレバ直チニ之ヲツナ
グ。熟練ト機敏トラ要スルコト
大ナリ。上手ナル者ハ一分時ニ
ヨク十數本ノ絲ヲツナグトイ
フ。
昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ一本ノ
ツムニ一人ヲ要スベキニ今ハ



第十一

第十一

僅カニ六七人ノ工女ニテ能ク二千本ノツムヲ扱フコ
トラ得ベシ。加フルニ彼ノ蠟燭ノ心トスル太キ絲蜘蛛
ノイノ如キ細キ絲細大意ノマヽニシテ手紡ノ如ク不
揃トナルコトナシ。機械ノカハ驚クベキモノニアラズ
ヤ。

第二十二課 蟲の農工業

蠶の絲を吐きて繭を造るは紡績の業に等しく、葉巻蟲
の絲にて葉をつゞり合するは裁縫の業に同じ。蜜蜂の
蜜を吐き又たくみに巢を造るは醸造の業と建築の業
とをかねたりといはんか。

縫
釀

大正二年四月八日 翻刻印刷
大正二年四月廿一日 翻刻發行

尋常小學讀本卷十二

定價金十錢

著作權所有

發行者 叢

文部省

發行 者刻

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

日本書籍株式會社

代表者 大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區食所町一〇番地

愛敬利世

印刷所

東京市小石川區堅固町一〇番地

博文館印刷所

大正二年四月十日
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

土金水火月

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

聖讀修讀讀

乙卯元月貳

鹿川教書

新全集

分年目次

目 録

第一課	明治天皇の御製	一	第十五課	南滿洲鐵道	五十四
第二課	日本海海戰	四	第十六課	歐羅巴の三大都	五十九
第三課	造船ノ話	十一	第十七課	獸類の移住	六十五
第四課	天氣豫報及び暴風雨警報	十六	第十八課	苦樂	七十
第五課	動物と植物の關係	二十	第十九課	コロソブス	七十三
第六課	鎌倉 （手書き）	二十三	第二十課	辻音樂	八十一
第七課	鳥居勝 （手書き）	二十六	第二十一課	烈士喜飯	八十五
第八課	日本の女子 （手書き）	三十	第二十二課	主婦の務	八十六
第九課	學校落成式	三十四	第二十三課	孔子と孟子	九十三
第十課	公事と私事	三十七	第二十四課	大國民の品格	九十七
第十一課	阿蘇山 （手書き）	三十九	第二十五課	自治の精神	百二
第十二課	我が國の農業	四十三	第二十六課	帝國議會	百五
第十三課	國產の歌	四十七	第二十七課	軍人に賜はりたる勅諭	百九
第十四課	貿易	五十	第二十八課	國民の至情	百七

序十二
序十二

尋常小學讀本卷十二

第一課 明治天皇の御製

修
聖

教育勅語と戊申詔書とは我等が身を修め世に處するの道を示させ給へるものにして之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。萬機の政をみそなはせし御かたはら折にふれてよみ出でさせ給ひし御製にも常に國家を思ひ臣民をあはれませ給ふ大御心の拜察せらるゝはかしこしとあかしこき極みなり。いでや其の二三を申さ

の西南方に在りて、直徑八百メートルの噴火口を有し、其の北なる杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。阿蘇山は此の如く複雑なる一大火山にして、山中に多くの噴火口及び温泉あり。火山全體の占むる面積は百十三平方里にして、東西十二里九町、南北十一里半に達せり。

火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほとばしり出づるより起る。其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。熔岩の光、火山灰及び水蒸

氣にうつりて見るもすさまじき光景を呈す。今より百三十餘年前安永八年櫻島の破裂せし時は、九州・四國・山陽・山陰・東海道までも火山灰を降らしたりといふ。

第十二課 我が國の農業

太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。是即ち農業の起原なり。

我が國は氣候温に、地味肥え、極めて耕種に適し、米麥の

栽培は最も早く開けたり。古來瑞穂みづほの國の名ある所以なり。

現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太からふとを除きて凡そ五百五十萬町歩あり。作物は米麥其の大部分を占めて、米の作付反別しへんべつは凡そ二百九十萬町歩、其の收穫は年々凡そ四千六七百萬石にして、麥の作付反別は凡そ百八十八萬町歩、其の收穫は年々凡そ二千萬石なり。我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

養蠶も亦早くより開けて、今尚益盛なり。繭まゆの取入高は年々増加して近年三百五十萬石を越え、生絲は輸出品

年十二

年十二

の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。茶も亦盛に栽培せられ、輸出價額年々一千萬圓に達す。

我が國の農業中最も開けざるは牧畜ぼくちゆうの業なり。是我が國の氣候風土の牧畜に適せざるにあらず、四面皆海にして、魚介ぎょかいの供給きふきやうゆたかに、鳥獸ちゆうぶつの肉を食すること少く、又衣服の原料も綿麻、生絲に仰たのぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

我が國の農業は、決して現狀を以て満足すべきにあらず。耕地つちの面積廣大なるが如くなく、れども、總面積の約一割五分に過ぎず。西洋諸國の耕地が其の總面積の二割

狭

匹

誤解

より六割に及ぶるに比すれば、尚甚だ狭小なりといふべく、大いに荒地を開き、美田を増すの必要あり。栽培法の如きも舊法になつまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、善良なる耕作用の牛馬、強健なる軍用の馬匹、滋養に富める乳肉等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。是大なる誤解なり。農業は我等が生活に必要な材料を作り出す所以にして、國家一日もこれなか

第十二

第十二

るべからず。農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉を勞するが故に、身體常に健全なり。農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。といへるワシントンの言味はふべし。

第十三課 國産の歌

我が大日本帝國の
沖繩諸島合せてぞ、
北海道の一廳と、
朝鮮新に加りて、

古き六十八國よ
府は三つ、縣は四十三。
外に南北新領土。
天産多きうまし國。